

講演3

「青年期論から見た大学生の成長—何が課題か—」

大阪教育大学教育学部・教授 白井利明

本日はこうした機会を与えていただきまして、誠にありがとうございます。私の専門は青年心理学というものなんですけれども、その中でも特に研究しているテーマがあります。それは時間的展望というテーマです。時間的展望といいますのは、耳慣れない言葉だと思えますけれども、見通し、将来展望、あるいは過去の方にも参りまして、自分の過去をどんな風に受け止めているかといったようなこと、過去に対する見通し、あまり見通しとは言わないかも知れませんが。そういった、未来に対する態度、過去に対する態度、そして今を大切に生きるとはどういうことなのか。それを時間的な広がりの中で考えることを研究テーマにしております。

それが私の専門なものですから、午前中のシンポジウムも、キャリア展望であるとか人生の見通しといったものがテーマになりまして、大変ワクワクして聞いておりました。今からのお話は、そうした時間的展望という話よりも、もう少し青年心理学の基本的なことをお話してみたいなというように思っております。また、基本的なお話だけでは何か教科書のようになってしまいますので、その中で私が特に最近考えていること、一個人の意見に近いかもしれませんが、そういったものをお話して、皆様方の何か参考になれば、と思っておりますので、よろしく願いいたします。

今日は、青年心理学の視点から、大学生の課題を示したいなと思っております。青年期の課題は何なのか、そういった基本をまず抑えたいと思います。その次に、大学生の課題は何なのか、そういったことに話を進めたいと思います。そして最後に、大学教育の示唆ということで、例えば具体的にはどんな取り組みが考えられるのか、そんなことの一つを皆様方に紹介することができればいいなと思っております。

今日の私の話の結論は、大学教育、キャリア教育といったものを、青年期教育という観点から見直してみたらどうだろうか、そういうことをお話したいというのが、本日の結論です。

青年期の発達課題を簡単にスライドにまとめてみました。これはよく言われることを単にまとめただけなんですけれども。青年期はご存知のように、思春期という性の芽生えから始まります。そして、恋愛、結婚といったような生涯のパートナーを見つけていく、そういった性の発達あるいは次世代の家族形成、そういったものが課題となる時期です。また、アイデンティティの達成、人生観の確立といったような、自分はなぜ生きるのか、どのように生きるのか、そういったことを様々に考える時期です。

いま私は中年真っ只中なんですけれども、ここでは、中年期も自分自身、考えるところがたくさんありまして、どう生きるべきか、自分の将来をどういうふうに考えていったらいいのか、自分なりに真剣に考えております。こういった目から見ますと、青年期の人生観の確立というのは、とても確立には遠いなというふうに思っております。ここでは確立という言葉を使ったんですけれども、必ずしも確立ではなくて、自分なりに一生懸命で考える、そういうことがあればいいんじゃないかな、と思うような次第です。ですから決して、確立して青年期が終わるわけではなくて、自分というものにこだわって、生きる意味というものにこだわっていく、必ずしも答えは出ないんですけれども、そういう時期が青年期ではないかなと思います。

それから友人関係の互惠性。心の友を見つける、ということなんですけれども。互惠性といいますのは、ギブ

アンドテイクの関係だと思えます。自分が相手のために何かをする。相手からも何かをしてもらう。あるいは自分が相手の立場に立って考える。自分のことも相手から考えてもらえる。そういう対等な関係の中での互形成というものを作ってまいります。あるいは心の友を見つける。一生の友だち。私自身も大学時代の友達といまでもずっと長い付き合いがあります。社会に入って、職場に入るとの知人友人も非常に貴重なんですけれども、やはり大学時代、自分をさらけ出して一緒に苦楽を共にした友達というのは、掛け値なしに自分の糧となっているな、というふうに思えます。こうした青年期の友人関係は、単にその場が楽しいということだけではなくて、そうした人生の友というものを見つけられるんじゃないかなと思えます。

それから、職業能力の形成。一つの職業を選ぶ、ということなんですけれども。こうした専門というものを学習し、そして将来の、人生の基礎を作っていくこと。これはもちろん大学生に限らず、青年期の発達課題だと思えます。また、一つの職業を選ぶ、というように、一つ、というふうにしたのは、結局一つの職業を選ぶということは、多くの仕事をあきらめる、ということでもありまして。そうした多くの仕事をあきらめていく、ということ。それも成熟の過程では避けられないことだと思えます。よく、決められない、といわれますけれども、それは逆に言えば、捨てられない、ということにもなりますし、一つのことを決めるとか決めないとかいった場合には、価値観ということも問題になると思えます。

社会常識を身につけ、社会に入る、ということも非常に重要だと思えます。社会常識といいますと、挨拶ができるとか、様々な常識があるかと思うんですけれども、ここではそうしたことだけではなくて、広く社会についての一定の知識というものを得る、ということも入れております。

こうした発達課題、このことを一般的に言われていることを踏まえたうえで、私自身、非常に大切だなと思っていることを一つお話してみたいと思えます。その大切だなと思っていることは、こうした発達の的に考えてみる。つまり、児童期に比べて、青年期はこういう課題があるんですよ、と。児童期は親の監督、保護の下で発達するわけなんですけれども、青年期になりますと、保護や監督から抜けて、自分の足で立っていく、自立をしていく、精神的経済的社会的に、自立をしていく。そういうことが課題ですよ、というふうに、児童期と比べてみると、青年期はこうですよ、というのが発達課題なんですけれども、それだけではなくて、やはり社会・歴史的な意義というものも同時に考えてみる必要があるんじゃないかなと思っております。

青年期自身が、18世紀の産業革命の中で出てきた時期だ、と言われております。労働の義務というものから解放されて成り立った時期だと言われていたわけなんです、それ以外に、ジャン・ジャック・ルソーの考え方に注目したいと思っております。ルソーはご存知のように、エミールの中かで、第二の誕生と名づけております。この第二の誕生、といいますのは、男の子として、女の子として生まれる、というふうには書いてあるんですけれども、ルソーはですね、次のように言っていたんじゃないかなと思えます。つまり、子ども・青年の未熟さのなかに、先行世代を乗り越える可能性を見た、ということじゃないかなと思えます。この未熟さといいますのは、まだ大人になり切れていない、半人前、ということで、早く大人になるように、そんな風に見られがちなんですけれども、そうではなくて、未熟さそのものに価値があるんだ、そんな、以前とは違う見方を提案した、そこに画期的な、第二の誕生の意味があるんじゃないかな、というふうに思っております。

つまり若者を、今ある社会に順応させるということではなくて、新しい社会を共に作っていく、というふうな青年を、若者を捉えた、というところがあると思えます。ルソー自身は市民革命の思想家で、そして社会というものを変えることができる、契約によって成り立っている、という風に考えたので、こうした社会の変革というものも視野においていたように思えます。そして社会を変えるということだけではなくて、その中に青年期の固有の価値を認める、ということと分ち難く結びついていたところに、ルソーの青年期論の持っている生命力というの

でしょうか、先見性というものがあつたんじゃないかな、というふうに思っております。

なにぶん私は心理学者ですので、こうした哲学や歴史学の分野は非常に疎いんですけれども、私なりにまとめてみますと、何かこう今の青年、若者というものを、我々の考える枠の中に収めていこうという発想ではなくて、もっと青年や若者の持っている力というものを信じていこうという風に考えたところに、ルソーの画期的な意味合いがあるんじゃないかなと感じている次第です。

これを少し模式図的にまとめてみました。かつての時代は、子どもは小さな大人でありましたし、若者期というものは大人になる準備の時期でした。そして、社会の体制に適應していく。しかし近代以降は、子どもには固有の価値というものがあつて、そして青年期は自己を探求していく時期、その結果、今の大人とは異なる社会というものを構想していく、作っていく、そういう担い手となる、そんな対比ができるんじゃないかなと思います。こうして、かつてのように、蛙の子は蛙といったような時代から、自分の生き方というものを見つめ、そうした新しい社会を構成していく、そして自分なりの生き方というものを考えていく、そうした時期として、新しい青年期の可能性というものが、新しい可能性というものがあつたんじゃないかなと思います。

こうした新しい可能性がなかなか実現しない、見え隠れしているけれどもなかなか実現しない、そういったところに、今日の抱える様々な問題というものが生まれているんじゃないかな、というふうに私は基本的には見ております。

例えばどんな問題点があるかといいますと、かつては蛙の子は蛙ということで決められてしまっていたわけなんですけれども、逆に言えば、労働というものや社会というものと密接に関わっていました。身近にいる大人を見て、自分もそんなふうになるんだ、あるいは自分の今やっていることが役に立つ、そういったものをつなぐことが出来たと思います。

しかし今は自分のモデルがありません。若者が大人になったときには違う社会になっている可能性もあるわけですし、変動しております。また、大学で学んでいても、それが社会に入ってどんな風に役に立つのか分かりません。我々大人も、こういう大人になれ、ということをはっきり言うことができません。自分をモデルにしろ、というようなこともなかなか言えません。そういった問題点があると思います。若者が自分というものを見つけて、そして自分なりの生き方を考えていく。しかし、労働や社会というものは切り離されている、モデルがない、そういったものはですね、先ほどの、近代に入ってから自己探求というもののなかでの条件というものがなかなか、新しい可能性はあるんだけど作り出されていない、そういうことと関係するんじゃないかなと思います。

それと全く同じことなんですけれども、自己の探求が、個人化、心理化されている、という風に考えられます。アメリカの研究なんですけれども、大人像、自分がどういう大人になるのか、ということ考えたときに、かつては、就職すれば大人、結婚すれば大人というふうに、人生の出来事によって区切られていたわけなんですけれども、今では、就職、結婚、あるいは一人暮らし、あるいは外国で言う徴兵というのがありますので、徴兵によって大人、一人前、というのがあつたらしいんですけれども、今はそういうものとあまり関係がないそうです。むしろ、十分な人間、といったようなもの。自分は十全な人間である、あるいは十分な人間である、自分というものに対して自分が満足しているといったような、客観的な基準のない、その人がそういう風に思うということが大人感と非常に重要な関連があります。このように、客観的な基準が必ずしもないし、外的な出来事も関連しないで、その人がそう思えばいい、みたいなことになっていることを、個人化、あるいは心理化されている、というふうに見てみたいわけなんです。

一頃、自分探しの落とし穴、ということが言われた時期がありました。特にオウム真理教と呼ばれることがあつた頃に、私もそういうことを書いたりしていたんですけれども。あるいはフリーターのやりたい仕事志向も、やり

たいことの隘路、という形で落とし穴があったかと思います。らっきょうの皮めくりみたいに、本当の自分は何だろう、ということを探しても、らっきょうをめくっていても、結局最後は何もない、何も残らない。そんなふうに、自分はどう生きるのかということ、本当の自分は何だろう、自分のやりたいことは何だろう、ということを一生涯懸命探しても、こうした個人化、心理化されている筋道の中ではどんどん悪循環になってしまうだけのように思います。

それではどうしたらいいのかというと、実は自己の発見というのは、自己理解シートに一生懸命書くことではなくて、世界の発見というものと密接に関わっていると思います。自分が何をやりたいかということを考えるだけではなくて、世の中にはどんな職業があるのか、あるいは世界の仕組みはどうなっているのか、どんな人たちがいるのか。そういうものを分かっていくプロセスと、自分というものを分かっていくプロセスというものが同時に行われたいいけないんじゃないかなという風に考えています。そこで、この二つを課題にしながら、もう少しお話を発達の方に帰って、お話をしてみたいと思います。

先ほどの自己の探求、というふうに申し上げたんですけれども、それをもう少し違う言い方で変えてみたいと思います。自我の解体と再編成、というふうに言い換えてみたいと思います。自分作り、あるいは自分崩し。自分崩しというのが自我の解体で、再編成というのが自分作りということになります。

児童期までに、親の監督や親の保護の下で、どちらかといえば親の価値観を内面化してできたもの、できた価値観というもの。つまり、こういうことはしている、こういうことはしてはいけない、といったようなものが児童期までに主として親の価値観を内面化する中でできるんじゃないかなと思うんですけれども、そういったものを青年期に一旦崩していく、あるいはそれが本当なのかということに吟味していくことが課題になると思います。自分にとっては当たり前だと思っていたことが当たり前ではないということもわかっていくと思います。自分にとっては当たり前だと思っていたことを、様々な友だちと関わる中で、どうもうちの家は普通じゃないぞとか、それが全部正しいわけじゃないんだといったようなことを、青年期になると感じ始めると思います。そうやって少しずつ、親から離れていく、自立をしていくんだと思います。

そういうプロセスのなかで、ただ怒られるのが怖いということで決まりというものを守っていた状態から、少し違反してみるとか、ちょっとやんちゃなことをやってみるとか、あるいはやろうとしてみるとか、そういった決まりを破るようなことも、ひょっとしたら起こる場合もあるかもしれません。いずれにしても、いままで本当にただ守っていただけの状態から、それを少し破ってみようとする、あるいは破ってみようということを考える、そういったことのなかで、実は青年期の自分崩しというもの、あるいは本当にそういうことが大切なんだ、ということに気が付いていく、ということがあるんじゃないでしょうか。逆にいうと、そういう青年期に入ったときに、一つの枠組みというものは非常に重要なんですけれども、逆にそれに対して抵抗してきたり、あるいはその中でもがいたりすること。そういうことの持つ発達の意義ということも考える必要があるんじゃないかな、というふうに思います。

それから、役割実験なんですけれども、これはエリクソンが言っている言葉です。安全なところに身をおいて様々な経験をする中で、自己概念を修正する。自己概念といいますのは、自分はこういう人間だと思っているイメージのことをいいます。そうした自己概念を修正していく。例えばアルバイトをするなかで、この仕事はあうんじゃないかとか、意外と自分は合わないと思っていたんだけど、意外と合うということが分かったとか、そういう形で自分というものの自己概念、自己像を修正していく。しかもアルバイトというのは、学生や生徒がやっているわけですから、そのアルバイトを止めてもかまいません、生活に直接影響するわけでもありません。そういう意味では安全なところに身をおいてやっているといます。それに対してフリーターの場合は生活がかか

っているわけですから、安全なところではありません。ですから必ずしもフリーターが様々な仕事を経験して、自己概念を修正していることは確かなんですけれども、これは言葉の定義の上から言えば、役割実験ではないといえるんじゃないかなと私は思っています。

この役割実験の中で特に重要なことは、できるだけたくさん色々なことを経験する、ということではないと思うんです。飲食店のアルバイトをしてみる、飲食店は自分は向かないんだ。次に製造業のアルバイトをしてみる、製造業は違うんだ。というふうに、色々なものを経験して、自分に一番合うものを見つけるということじゃないと思います。むしろ一つのことだけでもいいんじゃないかなと思います。一番重要なことは、悩んだり、模索したり、失敗することが許される、そういうことなんじゃないかなと思います。自分なりに、何か目当てをもってやってみる。そうしたらうまくいった、あるいはうまくいかない、というようなこと。それが一つ重要なことのように思います。

もう一つは、後でお話しようと思うんですけれども、様々な人と出会うということが実はこの経験の中で大切なんじゃないかなと思います。大人になったらこうならないといけない、といったことではなくて、世の中には色々な人たちがいるな、ということに気が付けばいいんじゃないかなと思います。この二つ目のことについては後で詳しくお話ししたいと思います。

さて、大人になることの現状、ということなんですけれども。こうした青年期、キャリア教育であるとか、あるいは大学教育。様々な課題意識を大人は持っております。それを一言で言うと、青年が、あるいは若者が、社会に出て行ってほしい。大人になってほしい、ということなんじゃないかなと思います。で、どういう現状があるのか、ということを少しお話してみたいなと思います。

皆様方の手元の図をご覧ください。中学生、高校生、大学生に対して、筑波大学の吉村さんたちが行われた研究です。で、この傍線。ちょっと見えにくいかなと思うんですが、一番上にあるのは、将来への自信というものです。これは、この先うまくやっていけるだろう、といったような項目から成り立っています。この将来への自信というものなんですけれども、図の方では上から二番目の図になっています。これが将来への自信というものを表してまして、中学校から高校にかけて上昇して、高校と大学は違いがない、そういう結果になっています。それから二番目、明確な将来像、となっています。明確な将来像は、自分の将来をどう過ごしたらいいのかわからない、といった項目を逆転させてここでは作っています。この明確な将来像というのは、一番下の線が明確な将来像になってまして、中学高校は差がないけれども、大学に入って上昇しております。

こんな風に、将来への自信、明確な将来像というものは、青年期を通してどんどん増大しているということがわかります。その次に、責任の重圧、というもの。これはどういう項目かといいますと、社会に出て仕事をやっていけるか不安だ、といったような項目を示しています。これは上から三つ目の線がそれにあたります。中学高校は違いがないんですけれども、高校から大学にかけて上昇しています。四つ目、自由の喪失、というふうに名前を変えたんですけれども、この項目は、大人になると自分らしさを発揮する、大人になるとより自由になる、そういった項目を逆転させたもので作っています。この自由の喪失は一番上の線になってまして、中学高校大学と行くにしたがってどんどん増大しています。この自由の喪失というものが高くなっていくわけなんですけれども、私自身考えてみると、子どものときは大人って自由でいいなとか、何でもやれるな、というふうに考えまして、早く大人になりたいな、というふうに私は思っていました。皆さん方どうでしょうか。ところがこれを見ますと、自由の喪失、というふうに、むしろ反対の傾向になっていて、私の時代とかなり違うな、という感じがします。

この結果から分かるのは、実は将来に対して自信を増している、大人になることに対して明確な将来像を持っている、こんな風にとっても肯定的な自信というものが増えていく一方で、大人の像というものが、非常に不自

由で、またかつ、重圧を感じている度合いも青年期に増大する、そういうことが分かります。大人になるということに対して、何か否定的なものを描いている。自分に対しては、なることに対する自信はあるんだけど、何か漠然とした不安のようなもの、そういうものが同時にあるということを示しているような気がします。

そこでそのことを、文藝春秋の本の中で稲泉さんという方がとても興味深いことを書いています。

「もうすぐ自分は社会に出なくちゃいけないのか。目前に広がっている真っ暗な空間に、誰かに押されて飛び込むみたいな不安が生じてきて、つかみ所のない妙な焦りを感じた」。

これを読みまして、社会に出るときに何か大きな壁のようなものが立ちふさがっているのかな、と思いました。もちろん壁といっても何も見えない壁なんですけれども、そんなような気がして、社会移行の障壁という名前を付けてみました。この方は様々な人にインタビューをした結果、次のような結論に至ります。

「どうやら社会というのは、はじめに感じていた、飛び込むような場所ではないらしい。必死に足を前へと進めているうちに、いつの間にか辿り着いているような場所のように今は感じられる」

というふうに書いています。結局、壁のようなものがあると思っていたんですけれども、実はそんなものは何もなかった、そんなことだと思います。こうした結論に至るのに、多様な大人との出会いというものがあったんじゃないかな、と思います。自分が、こういう大人ではだめだ、と思っていた大人が、実は社会の中では生き生きと生きていた。そういうことから、こういう大人じゃないといけない、こういう生き方でないといけない、といったような狭い見方を一度崩すことができたんじゃないかな、というふうに思います。

先ほど、青年期の発達課題は自我の解体と再編成であり、それは家庭の中で親によって作られた自分というものを一度崩していく、というふうにお話したわけなんですけれども、今度はフリーターをしている人で、カウンセリングに来た方を紹介してみたいと思います。この事例は『現代のエスプリ』(No.427)で長峰先生が紹介しているものです。

一人目の方は、大学院を修了後、医療福祉系のフリーターになりました。他人からの評価を気にして不適應を訴えて、カウンセリングにこられたそうです。親は学歴重視で、大きな期待を寄せます。将来、医者になれ、というふうに父親は言っていました。ところが残念なことに成績が伴わず、応えられません。この方は親の期待とは反対の方向を選んでいきます。反対の方向というのは、フリーターという意味です。親は正社員になれ、と言っていたわけなんですけれども、それとは全然違う道へと選んでいきます。親は正社員にならないといけない、ということを得々と言ってですね、それは決して反論できない正しいことなんですけれども、この娘さんは、自分が一生懸命親の期待に応えよう応えようと思ってきたこと、そういうことが分かってもらえていない不全感を抱えています。親のほうでも、本当は娘のことを色々思っているわけなんですけれども、そういう気持ちがしっかりと伝えきれていません。

他方、自我を解体した例ということで、この方も就職活動で迷って、同じ方のカウンセリングに来た事例です。就職活動で内定を得たが、父親は大手会社にしなさいと言い、どうしたらよいか分からなくなる。そこでカウンセリングに来たそうです。大企業と中小企業の両方から内定をもらった、どちらにしたら良いのか分からないけれども、父親は大企業の方にしなさいと言っている。この方も小さい頃から優等生で、回りのことを気にしながら生きてきた。自分の気持ちをあまり言えていない、と自分は言っています。親のほうでも、気持ちを伝えきれていません。しかし、この方は親戚やバイト先の同僚と話し合う中で、自分の気持ちを確認していきます。自分は大手企業ではなくて、やはり自分のやりたい仕事を選ぶということを決めて、そして親には手紙を書きます。そしてその手紙を見た親は娘の決定を支持する、という形で終わっていきます。

自我の進路決定をしたものでできなかった場合ということで二つ紹介したわけなんですけれども、この二つの事例から分かることをですね、私なりに言いたいことを少しまとめてみました。

一つは、親が思う良い学校よい会社という期待や正論は現実とあわないことがある、ということです。しかし、やっぱり良い学校、良い会社と、そういう道が良いかどうかはわかりませんが、私自身二人の大学生の息子と娘を抱えていて、どうしてもこう、別に良い学校良い会社とはいわないけれども、もうちょっと考えろよ、ということはどうしても言ってしまいます。ですから、この気持ち、別に正論を言っちゃいけないというわけではなくて、どうしても親は子どもの幸せということを考えるあまりに、やっぱりフリーターじゃなくて正社員なれよとかこういうふうによれよ、ということをしてしまう場面もあるんじゃないかな、というふうに思います。

また親も青年も自分の気持ちを表現することが苦手。必ずしも相手にしっかりと話すことができていません。また相手に、親に自分の気持ちが分かっているとも思っていない。しかし両者に共通しない点は、他方は親の期待に応えよう応えようと相変わらずしているのに対して、一方は自分なりの進路というものを選んで、そしてそれを決定していく、という大きな違いがありました。こうした違いは、やはり家庭のお父さんやお母さんと話をするということ以外に、親戚、あるいは友だち、あるいは同僚といった人たちと話をした、ということがこの事例では大きいのではないかと思います。

さて、社会関係資本、とスライドに書きました。午前中のパネルディスカッションでも、浅野先生が社会関係資本についてのお話をしてくださいましたけれども、これは社会学、政治学分野の、あるいは経済学も含むかもしれませんが、そういった分野の言葉だと思いますが、近年は外国の研究では心理学の文献にも、社会関係資本と呼ばれる言葉を使うものが出てきております。社会関係資本というのはどういうものかといいますと、信頼できる人間関係や社会関係、というふうに、非常に大雑把に言えばそういうものだと言われています。

個人というものがあって、そして個人が何かやりたい仕事というのが明確にあって、そして職業を実現していく、これは個人で完結するモデルだと思うんですけれども、実際にはそのような個人で完結するようなモデルで人間が動いているわけではありません。社会関係資本と呼ばれるような、信頼できる人間関係や社会関係との相互作用を通じて、個人が職業を選んだり、自分のやりたいことに気が付いたり、行動を選択したりしているんだと思います。社会関係資本からサポートを受ける、例えば悩みを聞いてもらう、励ましてもらう、情報を得る、といったようなものを社会関係資本から得られているんじゃないかなというふうに思います。

例えば就職活動というものを考えてみても、これもパネルディスカッションで登壇された下村先生の研究なんですけれども、就職活動の情報源として非常に大きなものは3つあるそうです。一つは就職サイトの閲覧というものなんですけれども、これは就職活動の前半に重要な活動なんですけど、しかし就職活動全般を漠然と見通すだけで、結局その就職活動がうまくいったかどうかとは関係がありませんでした。その次に、OB や OG との接触、というものがあります。これは実は上首尾な就職活動と最も関連があった、というふうに下村先生は言うておられます。どうして関連があったかといいますと、もちろん OB や OG は、企業の方から紹介されて、そして接触しているという面も大きいと思うんですけれども、本人にとってどういう役に立ったかという、企業で働くリアリティを形成したという点が最も重要であるというふうに下村先生はおっしゃっています。

つまり、その企業の中で働いたらどんな風に働けるのか、職場の人間関係はどうなっているのか、実際にどんな仕事ができるのか。そういう企業で実際に働いている人しか知らないような情報というものを、OB や OG の人から得ることができる。そのことによって、本当にその企業で自分が働けるのか、あるいはやりたいことができるのか、あつてるのか、そういったことを吟味することができたり、あるいは自分の要求水準や目標というものをより現実的で具体的なものに変えることができるわけなんです。こういった OB や OG との接触、必ずしも友

だちではありませんし、あるいは親でもないし学校の先生でもない、実際に働いている、しかも自分が希望する職場で働いている一歩前の人たち、そういった人たちとの接触というものが、最も就職活動が上首尾にいったかどうかと関連していたそうです。

三番目に友人なんですけれども、友人との情報交換は活発に行われました。しかしこれは上首尾な就職活動とは関連がありませんでした。友人との情報交換、例えば悩みを聞いてもらう、あるいは面接試験の中身を交換する、それから企業の情報を得る、そういったことがあるわけなんですけれども、これは就職活動の動機付けになったり励ましにはなったりするわけなんですけれども、これによって就職活動がうまくいくかどうかは関係なかったそうです。

こんな風に、OB、OG との接触といったような、家庭でも学校でもない、実際に働いていて、しかも一歩前の人たちとの接触というものが、その人が就職活動をやり遂げていくことと関連があるように思います。

私の学生の就職活動を見ておきますと、就職活動の中で成長する学生は自分の希望を実現しているなというふうに思うことがあります。自分はこんなことをしたい、それがずっと変わらない学生は途中であきらめてしまったり就職しなかったりしてしまう場合もあるんですけれども、自分なりに本当にやりたいことを考えて、現実を見て、その中で自分のやりたいことを具体的に実現していく、そんな風に成長していける学生は、最後に目標を実現しているなというふうに思うことがあります。

こうした就職活動を通しての成長というものも、様々な大人との出会いの中で行われるということであって、単に自己理解シートとか、そういうものを読んで記入したから自分が見つかるというものでは決してないと思います。個人の中で完結した自己理解ではなくて、現実の企業で働くということ、そういうことを知る、世界の発見というものとパラレルになることによって、そういうことができるんじゃないかなと思います。

こうした社会と接近する力なんですけれども、今からお話することは今まで話したことと浮いてしまうようなことかもしれないんですが、あえてこんな風に言いたいと思います。助けてください、と言えることが大事なんじゃないかなと思うんですね。つまり、人に助けを求める、そういうことが言える、ということは意外と大事なんじゃないかなと思います。

大学教育は役に立つか、ということなんですけれども、これは福島大学が、卒業した1年目から3年目の方に対して調査をしたものだと思います。1位がいつか役立つ、2位が様々な体験、3位が付き合い、4位が学び方考え方、5位は全く別、というふうに並んでいます。いつか役立つ、というのはそうだと思うんですけれども、二番目の様々な体験、というところに注目してみたいと思います。この様々な体験というのはどういう体験なのか、ということなんですけれども。

様々な体験ってどういう体験？と私の身近な学生に聞いたら、次のように答えてくれました。「様々な体験ですよ」と(笑)。ちょっとよく分かりませんでした。そこで、様々な体験ってどういうことか、と紙を渡して授業中に書かせたんですけれども、やっぱり様々な体験としか書かれてきませんでした。

労働政策研究・研修機構が、どんな経験かということを知っています。「サークル活動での経験。組織をまとめたり、新しいことに挑戦する精神等、人間関係のつくり方等は、自分の大きな糧になっています」。「大学の経験というよりは、アルバイトやサークルを通して、多くの人々と接点を持ち、視野を広くできたという経験」。「学外実習(インターンシップ)を体験することによって、自分の興味ある仕事を体験でき、希望職種を決める上で大変役に立ちました」。そういったような経験です。

結局、大学時代の経験で社会に出て役に立った経験というのは、実習、クラブ活動、インターンシップ、ア

アルバイトといったような、どちらかといえば実習だとか、体験したり、自分が主体的に参加したり、あるいは何らかの問題解決するようなものが役に立っていると思われま

そうしてみると、学生が役に立った、という感じ方がすると言う点で、大学の授業への示唆ということをこれから念頭に置きながらお話ししたいんですけども、どうも体験型であったり参加型であったり問題解決型であったり、あるいは他の人と交流したり、あるいは社会に出て行くようなそういう活動というものがいいのかな、というふうに思われると思います。

ここで私がお話ししたいのは、もっともっとうこういうことをした方がいいですよ、という話ではなくて、実はそうした活動と大学での学びというものをつなげて行くことが大事なんじゃないかな、っていうことをお話ししてみたいと思うんです。

そこで大学生の課題というものをまとめてみました。批判的思考力。これは論理的に考えたり、考えを言葉で言えるということ。自分が分かったと思うだけではだめで、それをしっかり言葉に直して相手に伝えることができる。これが大学の学びだと思うんですね。

それから、異なる意見を統合する。ある人はこう言う、別の人はあんなふうに言う、でそれを二つを統合してみるとこんな第三の道が見えるんですよ、そういったものを批判的思考力の中に含めたいと思っています。単に物事を斜めに見る、とかいったことではなくて、本当に、偉い人が言ったから鵜呑みにするとか、見えている世界と一致するから正しいんだ、ということではなくて、それは本当なのかどうか、ということをきちんと自分の頭で考えること、それが批判的思考力なんですけれども、やはり大学の学びというのは、こういった批判的思考力の形成という部分が大きいと思います。

それから二つめは社会関係資本。友人、一生の友人を得るとか、あるいは恋人を得る、恩師と出会う、あるいは社会というものを知っていく、あるいは学歴というものそのものが大きな資本になるということも考えられます。

それからコンピテンス。ここでいうコンピテンスは有能感のことです。環境を変えることができるという自信のことを有能感、コンピテンスというふうに名づけます。

それから専門性。ここでは知識、方法論、あるいはそれがどのような社会的意義というのがあるのか、ということも大学で学習します。

こういった批判的思考力や専門性といったものをつなげていくこと、それが大学教育の課題ということになるんじゃないかなと思います。

そこで実際につなげた場合に、どんな大学教育が可能になるのか、ということで、全面的に繋がっているわけじゃないんですけども、一つのつながりのあり方ということで、初年次教育を例にして考えてみたいと思います。初年次教育というのはご存知のように、大学に入学した一年目の導入教育のようなものを指しています。通常は、大学教育への動機付け、学習の動機付け、スキル学習、授業の受け方、ノートの取り方、勉強の仕方、そういうものも教えていく。あるいは討論の仕方といったようなもの、調べ物の仕方、ネットの使い方、パソコンの使い方、そういったことも含むかもしれません。それから補習授業、高校で十分習わなかったことをもう一回復習する、こういったものが中心になるかと思います。

それだけではなくて、さらに4つくらいのことも考えてみようということです。一つは学生をアカデミック・ラーニング・コミュニティの一員にしていく。このアカデミック・ラーニング・コミュニティーというちょっと舌を噛みそうな言葉なんですけれども、これは京都大学のセンターの大塚先生が使っておられたので、私もそれを使わせてもらっています。我々教員職員も、大学の学びの中の、あるいは学問をするということのコミュニティを作っていると思うんですけども、その中に学生を位置づけていく。

それから学生にどんな世界を提示し、認識を再構成していくのか、ということです。どんな世界を提示するのか。単にスキルだけではなくて、世界を提示して、その世界から学んでいく。世界を構築する、ということが自己の理解ということとパラレルになっているわけですから、どんな思想を持った世界を提示するのかは重要だと思います。

それから学生の学びあいを授業内外でどう組織化するのか。やっぱり学生はなかなか学習時間が少ないですから、勉強してほしい。そして、授業中に勉強するだけじゃなくて、授業の外でも勉強してほしいので、それをどういうふうに作っていくのか。

それからリフレクションで成長の確認と共有というものを行っていく。キャリア教育だとか大学教育というと未来志向なので、自分の生き方、将来像、そういうものを作っていく方向に関心が向きがちなんですけれども、私自身は時間的展望というものを研究していて、将来像を作っていくことは、過去をくぐってできてくる、っていうふうに考えています。ですから過去というものをどんなふうに再構成するのか、ということが非常に課題となりますので、こうしたリフレクションというものをしていくことが重要であると考えています。

一つの実践例として、信州大学で行われた実践、西垣先生が紹介されたものをかいつまんでお話してみたいと思います。教養ゼミ、というものの実践です。これはたまたま長野でスペシャルオリンピックスというものが開かれまして、それを取り上げました。スペシャルオリンピックスは、発達生涯のある子どもたちの国際オリンピックでして、アメリカのワシントンが発祥の地らしいんですけど、ボランティアが大量に求められた、ということがきっかけになっているそうです。

授業外での学びとして、用語集作りというものをしたそうです。webに掲示板を立ち上げて、分からない言葉をみんなでどんどん書き込んでいく。そういったことを授業外にも行っていく。あるいはポートフォリオというものを活用する。そして授業が終わったら来年度の受講生に向けてメッセージを行う。そういった、これは取り組みのごく一部なんですけれども、行われたそうです。

私なりにとてもいいなと思うのは、一つは、学生に提示した世界観として、敗者のいない競技というものを提示したのはとてもよかったと思います。もちろん色々な世界を提示したと思うんですけども、敗者のいない、ウィンウィンの関係というものを学生に提示した。学生はとてもそのことが目からウロコだった、と聞いています。それからその中で、障害のある子どもに接した、あるいはボランティアに接した、様々な人と出会っています。また地域で自分が必要とされ、役立つ経験をしました。そして、webで用語集作りを行って、授業内外の学びあいを組織化しました。ポートフォリオでリフレクションをして、成長を確認しました。また、次年度の受講生へ向けてメッセージを行うことによって、ラーニングコミュニティへの参加を促しました。こうした取り組みの意義があったと思います。

結局、青年期の自己の探求というものは、世界を発見することによって自己を発見する、そしてそれをまた振り返って、自分の成長を確かめていく。そしてまた新しく方向付けをする、といったようなものを授業の中で、あるいは大学教育の中で仕掛けというものを作っていく、ということが求められるんじゃないかな、と思います。

大学教育の示唆として、私が言いたかったことを一言で言いますと、青年期発達の視点を入れたい、入れてみる、ということをお話しました。安全なところに身をおいての役割実験、あるいは多様な大人や同輩との関わりの中で自分の視点を相対化していく、青年期の課題探求を専門性の学びの中に位置づけていく。そんなことも必要ではないかということをお話しました。ご清聴ありがとうございました。